

私達は諦めない
 聖マリア女学院高等学校
 二年 宗宮まどか
 想像してみよう。大切な家族や友人、恋人が
 拉致される。突然知らない国へ連れられて行かれ
 る。北朝鮮による拉致問題は他人事として考
 えてはいけない。
 私が拉致問題について考えるきっかけに打
 ったのは十歳の頃、新潟空港で見た10ネル展
 だ。そこで見たアニメ「めぐみ」は幼か
 った私にとって衝撃で、当時感じた恐怖は今
 でも覚えている。先日、横田滋さんが亡くな
 ったというニュースが飛び込んできた。今、
 高校生の私にできることを考えた。
 ご家族は今もずっと彼らの帰りを諦めずに
 待ち続けてみえる。ご家族の高齢化が進み、
 子供との再会を果たせないまま七十年た親
 は二〇〇二年の日朝首脳会談以降でも八人い
 ら、しやる。今年二〇二〇年、横田滋さん、
 有本嘉代子さんが娘との再会を果たせず七

なった。有本さんはメッセー
 ジの中で「恵子
 が帰るまでは元気でいたい
 ーとおっしゃって
 いた。胸が痛くなつた。北
 朝鮮による拉致問
 題は出来る限り早く解決さ
 せる必要がある。
 私達高校生にできることは
 拉致問題につい
 て知り、調べて理解すること
 だ。横田めぐみ
 さんが拉致されたのは十三
 歳の時である。この
 事実を同じ世代の人達が知
 り、当時者意識
 をもつことが大切である。そ
 うすれば、若い
 世代の関心が薄れていくのを
 防ぐだろう。毎
 年十二月十日から十六日ま
 での「北朝鮮人権
 侵害問題啓発週間」をさら
 に浸透させる必要
 がある。この週間を使い、
 学校において拉致
 問題について学び、意見を
 交流する場を設け
 るべきだ。小中学生誰もが
 拉致問題を知ること
 が出来るように、教育課程
 に一時間でいい
 ので組み込んでもらいたい。
 学生達が拉致問
 題を知り、考えるきっかけ
 をつくることは問
 題解決への一歩になる。
 私の伯母はめぐみさんが行
 方不明になつた

一九七七年、十歳であった。伯母が高校生の
 時、新潟県ではめぐみさんが北朝鮮に拉致さ
 れたという噂がすでにあつたが、正式に拉致
 の情報が入ったのは何年も後のことだつたと
 いう。伯母は当時、その噂を深く考えずに話
 題にするだけだつた。もしあの頃、自分達が
 報道機関や政府に調査するよう要望して世論
 が動いたら、何か変わつていたかもしれない
 と伯母は今、後悔している。国の仕事、大人
 の仕事と捉えず、発信していくことが私達若
 い世代の使命のように思う。例えば、SNS
 は意見を発信する良い方法である。政治的な
 内容は賛同だけでなく批判も出てしまいが、
 議論を起こすことで、拉致問題が認知され、
 風化を防ぐ手助けになるはずだ。

私達にできること。まず一人一人が北朝鮮
 の拉致問題について知り、そして意見をもち
 とつ。そしてそれを発信しよう。それを継続
 し大きな力にしよう。問題が解決するまで、
 私達は決して諦めない。